



貧者の一灯

寿都医師会 会長
黒松内町国民健康保険病院 院長
秀毛 寛己

地域医療崩壊解決のための北海道医師会会員有志の叡智を結集した種々の処方箋について、先の2回の北海道医報熊通信特集を拝読した。行政的に国や道、さらに各自治体のレベルでなすべきこと、疾病ごとの地域での集約化と広域化による医療機関の役割分担、総合診療医育成、大学等教育病院のあり方、女性医師等支援、そして患者である住民の教育、啓発など…。それぞれに地域および医療についての明確な定義付け無く、主に執筆者の環境を中心に、あるいは得た知識やデータを基に理論展開されていると思われるが、なるほどとうなずく妙案や感懐ばかりである。そして行間に見え隠れする寄稿者達の医療崩壊阻止への熱い情熱が力強く伝わってくる。すべてが正解であり各段階でそのように全力で努力すべきであろうと思う。医療崩壊とは根源的に医療に対する多面的な価値(観)の崩壊と医療従事者(医師)への責任転嫁が生み出した産物である。当然正すのは一筋縄では行かず容易ではない。

ところで地域医療の“地域”とは何を指すのかということであるが、地図上の位置や地勢、中央との距離というディメンジョン的な観点もさりながら、もっと一般的に生活や暮らしに密着し不可欠なものと抽象すればどうだろう。つまり暮らしのインフラあるいはライフラインとしての医療という意味である。国や都道府県の行政レベルでは医師配置や育成、医療の連携を都市ごとに中核医療センター化とブランチとしての町村の医療機関あるいは診療所群に役割分担する。マクロ的政策レベルの戦略としては至極妥当である。限られた医療の人的および物的資源の有効再分配という意味において。だが、ローカルなエゴというそしりをあえて覚悟で地域の医療をライフラインと置き換えれば少し趣が変わってくる。住めば都というように、へき地・離島の住人であっても都会を対極に常に意識しながら居住しているわけではないし、人口の多い都会を中心に物事を進めればよいとは決して考えたりはしない。ローカル線の廃止のように自分たちの暮らしが前より不便になれば、世の常一般の経済効率上仕方ないと諦めつつも切実な抵抗はあるし、単純な大局的判断では決められない。

しかし、医療をライフラインやインフラと考えるのは、どうも先の震災の被災地の住民や大切な医療機関が失くなってしまった自治体住民だけのように思えるのはどうしてなのだろうか？ 国内に住民の

医療へのサポーター意識の高いごく少数の事例はありはするが、残念ながら鉄道存廃の関心ほどは高くない。へき地においてさえ医療のインフラとしての価値は理解されていないようだ。当地において平成22年4月より23年10月まで1年半にわたり、病院の医師は自分だけという異常事態が続いた。しかし大方の町民や行政に全く危機感は無く、この町全体の医療への意識の低さを実感させられた。町民に至っては、おそらく過労死か逃散していれば医者がないのは不便だと、その時にやっと行政の責任を問う程度かもしれない。むしろ行政はかえって人件費削減と費用対効果に喜んだ様子である。

このような町の意識にかかわらず、医師として地域の生活のインフラを支える責任感で先の見えない中で苦闘した。そして一昨年10月に平成17年に道職員として当院に緊急派遣された内科医師がその事態を見かねて常勤医として着任。昨年4月よりさらに1名増え現在3名体制となった。当地のようなへき地でまさに奇跡的にありがたい事例だと思う。同じようなへき地や離島で住民、行政の無理解と崩壊する医療事情に翻弄されながらもあたかも沈む船に残って頑張っているような、きっとどこかにいる感謝もされず、報われない医師たち。何とか地獄から単独生還できた今、自らの経験に重ねて彼らのことを思う。

ところで医療崩壊解決の処方箋の中で、特にへき地医療に対し超緊急的に講じる手段について語られたことはあるのだろうか？一般的に医療崩壊を疾病症候群と捉えると原因論、予防方法、慢性期対策には理論的裏付けと有効な戦略を確信できるものが多い。しかし、急性期となるにつれ対処は難しく、特に超急性期には治療法の提示すらなさそうに思える。医療という生活のライフラインが破綻しかけ被災民はもしかして医師たった数人だけのそしてその医師達がいなくなれば住民全体が医療難民と化すであろう自治体に対して、東日本大震災の時の医療ボランティアの精神をもって支援はできないものだろうか？

就業する医療機関が複数だと規制が足を引っ張るように邪魔をしてしまっていて結局、単発的パート的な支援しかできないのが現状である。

崩壊しているといっても医療の場合、地震・災害とは違い規制緩和要件は満たさない。

そのジレンマを解消すべく、全く消化できていない年休を利用してボランティア的支援に行くことを思いついた。自分単独のちっぽけな力では焼け石に水で何の解決にもならないかも知れないが、とにかく今年はそのように実行してみたいと思っている。